

〔直訳〕

- 31 他の たとえ話を 彼は前に置いた 彼らに 言いつつ、  
「似て いる 国は 天の 種粒に からしの、  
ところの 取って 人間が 蒔いた 畑の中に 彼の。  
32 確かにそれは より(最も) 小さく ある すべての 種のなかで、  
だがとき それが成長した  
より(最も) 大きく 野菜のなかで それはある そして それはなる 木に、  
その結果 来ることに 鳥が 天の そして とまることに 枝の中に その。」  
33 他の たとえ話を 彼は語った 彼らに、  
「似て いる 国は 天の パン種に、  
ところの 取って 女が 隠した 小麦粉の三サトンの中へ  
まで 醗酵する 全体が」。
- 44 「似て いる 国は 天の 室に 隠されたものに 畑の中に、  
ところの 見つけて 人間が 隠した、  
そして 喜びから 彼の 彼は去る  
そして 彼は売りに出す すべてを ところの 彼が持つ  
そして 彼は買う その畑を。」  
45 また 似て いる 国は 天の ある(人に) 商人に 求めている者に 良い 真珠を。  
46 だが見つけて 一つの 貴重な 真珠を  
出かけて  
彼は売った すべてを ところの 彼が持っていた  
そして 彼は買った それを。  
47 また 似て いる 国は 天の  
網に 投げられたものに 海の中へ  
そして すべての種類から 寄せ集めたものに。  
48 ところのものを  
とき それが満たされた  
引き上げて 岸の上に そして 座って  
人々は集めた 良いものを 入れ物の中へ、  
だが不適當なものを 外へ 人々は投げた。  
49 そのように それはあるだろう 終わりの中で 世の。  
出て行くだろう 使いたちが  
そして 選り分けるだろう 悪い者たちを 真ん中から 正しい人たちの  
そして 投げるだろう 彼らを 炉の中へ 火の。  
50 そこには あるだろう 泣くことが そして 軋みが 齒の」。

「新共同訳」

31 イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、32 どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」

33 また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」

44 「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。

45 また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。46 高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。

47 また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。48 網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。49 世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、50 燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

①最も小さな種が最も大きく

①a 「天の国はからしの種粒に似ている」

⑦ 「からし種」は、原文では「種粒」と「からしの」の二語からなる句であり、「種粒」という語によって、その小ささが示されている。また「種粒」という語は単数形なので、それが「一粒」であることもこの語は示している。「種粒」と32節の「種」は別の語である。からし種は、植物の中で最も小さいとされているので、「最少量」とか「最小」を表す比喩として用いられる。

① 黒からしの種は直径〇・九五から一・六ミリメートルで、重さは一ミリグラム。白からしの種はそのほぼ倍の大きさ。黒からしの種はすりつぶして、からしとするだけでなく、種油に似た油の原料にもなる。からしは、普通成長して一メートルほどになるが、三メートルにも伸びるものもある。一年生の植物であるが、茎は太く、秋になると茎や枝は硬くなって、小鳥の重さに耐えるほどになる。

①b 「天の国はパン種に似ている」

⑦ 「パン種」は、浸透する悪の力の象徴として用いられるのが普通である（出二二15以下、二三18、三四25、レビ二11、六10、マタ一六5―12、1コリ五6―8、ガラ五9）。しかし、このたとえば、天の国の活発な働きを表しており、良いものの象徴となっている。一サトンは約一二・八リットル。

① 「パン種」は「女が取って三サトンの小麦の中へ隠した」とある。「隠す」はここでは「混ぜる」の意味であるが、「目には見えない」、判別できない状態であることを暗示しているかもしれない。そうであれば、からしの種粒が「最も小さい」ことと「パン種」が見えないほどであ

ることが対応している。

◎「からし種のたとえ」と「パン種のたとえ」は対になっている。小さなからし種もわずかなパン種も、想像できないほどに大きくなり、全体を膨らませる。天の国も最後には豊かな実りを獲得する。

②天の国は「宝、ある商人、網」に関係がある

Ⓐ「天の国は似ている」

44節から三つのたとえが語られ、いずれも「天の国は似ている」という同じ表現で始められている(44・45・47節)。直訳を見ると、天の国は「宝」・「ある商人」・「網」に似ていると述べられている。しかしその内容から見ると、44節では天の国は確かに「宝」にたとえられているが、45―46節では「ある商人」ではなく、むしろ「真珠」にたとえられている。47節以下のたとえも、49―50節によれば、天の国は「網」ではなく「選り分ける」ことにたとえられている。つまりこの「似ている」という語の意味は、これらのたとえでは「関係がある」ということであり、「天の国は真珠を探しているある商人に関係がある」という意味になる。

Ⓑ「真珠」はその貴重さの故に「知恵」のシンボルとされる(箴二4、三14以下、ヨブ二八18、イザ三三6)。

◎「海の中へ投げられた網に、そしてすべての種類から寄せ集めたものに」

⑦「寄せ集める」は、48節で「人々は集めた」と直訳した語(シュツレゴ)とは別の動詞(シユナゴ)。48節の「良いものを集める」が、49節では「正しい人たちの真ん中から悪い者たちを選り分ける」と言い換えられており、「集める(シュツレゴ)」は「取り入れる・選ぶ取る」という意味であることが分かる。

①シュツレゴは、13章に6回用いられている。「毒麦のたとえ」とその説明では、いずれも目的語は焼き尽くされる毒麦やつまぎや不法を行う者である(28・29・30・40・41)。しかし、30節の「麦を集める」には、47節と同じシユナゴ(「寄せ集める」)が用いられている。麦を「寄せ集める」というのは、毒麦が選り分けられて、残った麦がまとめられるという意味合いなのだろう。

⑦シユナゴは13章に3回用いられるが、残りの1回は2節である。そこでは受動態で「イエスのもとに多くの群衆が」集まった」と使われている。イエスのもとには多くの群衆が集まって来る。天の国は、網があらゆる種類の魚を「寄せ集める」ように、人々を「寄せ集める」からである。しかし、イエスのたとえを理解できない「群衆」がいるように、網に集められた魚も良いものと悪いものを選り分けられて、悪いものは外へ投げ捨てられる。

Ⓓ「不適当なものを外へ人々は投げた」

「不適当な」と直訳した形容詞は、魚や木や果実が文字どおり「腐った」ことを表し、さらにより一般的に「役に立たない・不適当な・悪い」の意味にもなる。また転義して「邪悪な・不健全な」の意味にも使われる。ここでは、直訳にあるように「外へ」という語が用いられている。マタイは「外」という表現を特に裁きとの関連で好んで用いる(五13、八12、一二13、一五30)。

◎「世の終わりの中でそのようにそれはあるだろう」

49節の「世の終わり」という表現は、39・40節にも現れる。39節には「刈り入れは世の終わり

のこと」とあるが、「終わりの時代」を「刈り入れの時」にたとえる言い回しは聖書に多く見られる（エレ五一33、ホセ六11、ヨエ四13、2エズ四28―32、黙一四14以下）。マタイでは「世の終わり」という表現は、13章のたとえに3回用いられるほかは、24章3節と28章20節に現れる。24章では弟子はイエスに終末にはどんな徴があるのかと尋ね、28章では復活のイエスが「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と告げて、弟子を宣教へと派遣する。

③「畑に隠された宝」と「貴重な真珠」のたとえ

①a 「からし種」と「パン種」のたとえが対をなすように、「畑に隠された宝」と「高価な真珠」のたとえも対をなす。しかも、この二つのたとえは内容だけでなく、表現も対になっている。

「44節」

似ている 国は 天の

宝に 隠されたものに 畑の中に、

ところの 見つけて 人間が 隠した、

そして 喜びから 彼の 彼は去る

そして 彼は売りに出す すべてを ところの 彼が持つ

そして 彼は買う その畑を。

「46節」

だが見つけて 一つの 貴重な 真珠を

出かけて

彼は売った すべてを ところの 彼が持っていた

そして 彼は買った それを。

44節5・6行目と46節3・4行目とはほとんど同じ表現である。対になったたとえであるから、この同じ表現の部分に主眼点があると言える。つまり、天の国を見出した者は持ち物すべてを売り払って、それを買いたいと思うほどに、天の国に引きつけられるということである。天の国が人を引きつける力は、44節では「喜びから（喜びのあまり）」、46節では「貴重な（高価な）」と表現されている。

①b この対をなすたとえには相違点もある。

②44節5・6行目の動詞は現在形であるが、46節3・4行目の動詞は過去形である。

③次に、畑に隠された宝のたとえでは、宝を「見つけて」とあり、それが偶然であったことが示されている。それに対して、良い真珠のたとえでは、45節に「求めている商人」とあるから、探し続ける努力が前提とされている。

④三番目は、宝を見つけるのは自分の畑を持たない貧しい人であるが、良い真珠を買う人は、探し歩いているのだから金持ちと言える。

このように三つの正反対の要素が含まれている。それよって、天の国の現実がいつでも、誰にでも適用される広いものであることが示されている。

④世の終わりに選り分ける

③ 47節以下のたとえでは、網の中にはあらゆる種類の魚が寄せ集められているが、岸に上げられた時には不適当なものは投げ捨てられると述べている。このたとえは「毒麦のたとえ」(二三24―30)と対応している。

〔直訳〕

- 24 他の たとえ話を 彼は前に置いた 彼らに 言いつつ、  
「比べられた 国は 天の ある(人に) 蒔く者に 良い 種を 畑の中に 彼の。  
25 だが眠っていることのうちに 人間たちが  
来た 彼の 敵が そして 上に蒔いた 毒麦を 麦の真ん中に そして 去った。  
26 だがとき 芽を出した 草が そして 実を 結んだ、  
そのとき 現れた 毒麦も。  
27 だが近づいて 僕たちは 一家の主人の 言った 彼に、  
「主人よ、 ではないか 良い 種を あなたは蒔いた あなたの畑の中に。  
それでどこから それは持つ 毒麦を」。  
28 だが彼は 話していた 彼らに、  
「敵が ある(人が) これを おこなった」。  
だが僕たちは 言う 彼に、  
「それであなたは望みますか 出かけて 私たちが集めるように それらを」。  
29 だが彼は 話す、 「いいえ、  
ないように 集めるとき 毒麦を あなたがたが根こそぎにする それらと一緒に 麦を。  
30 許しなさい 共に成長することを 両者が 収穫まで、  
そして 時に 収穫の 私は言うだろう 収穫者たちに、  
『集めなさい 最初に 毒麦を  
そして 縛りなさい それらを 束へと 焼き尽くすことのために それらを、  
だが麦を 寄せ集めなさい 倉の中へと 私の』」。

〔新共同訳〕

- 24 イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。25 人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。26 芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。27 僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』28 主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、29 主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。30 刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』」

④ 27―30節に「言う・話す」という動詞が5回現れる。最初の二つ(言った・話していた)が過

去形で書かれており、次の二つ（言う・話す）が現在形、最後の一つ（私は言うだろう）は未来形である。25節以降の動詞はすべて過去形であるので、最初の二つが過去形であるのは当然と言える。また、30節の「私は言うだろう」が未来形であるのも、将来の裁きのことを語る文脈の中に出て来るので当然である。そうすると、過去形と未来形に挟まれている現在形がいつそう際立つてくる。

◎28節の「言う」と29節の「話す」は、文脈から見れば当然過去形となるはずだが、それを無視して現在形で書いたのは、そこに強調点を置きたかったからだろう。もし、この見方が正しいとすれば、このたとえの関心は過去や未来にではなく、現在にある。今は、毒麦を抜き去るのではなく、主人が忍耐している時である。

④「毒麦のたとえ」では、毒麦を神が忍耐している現在に視点が置かれている。「良い魚と悪い魚のたとえ」も、現在は「あらゆるものが寄せ集められている」時と捉えているが、49―50節にあるように、「世の終わり」に起こる選別に強調点が移っている。

◎「選り分ける」（アフォリゾー）は、「分ける・別々にする」を意味する。49節では、天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもを「選り分ける」とあり、世の終わりに行われる裁きを表す。終末の裁きを表す用例はマタイ25章32節にも見られる。この箇所は、栄光の座に着く人の子が行う裁きを、パレスチナの羊飼いの習慣にたとえている。羊飼いは、昼間は一緒に山羊と羊を放牧するが、夕方になると、寒さに弱い山羊を夜間に暖かくしておくために、「別々にする」。

### ⑤すべてを売り払っても、天の国を手に入れたいと願う

①天の国は、からし種やパン種のように、今は人の目に気づかないほどに小さなものであるが、やがて誰もが目を見張るほどに成長する。小さな種粒は鳥が止まるほどの枝を張るようになり、パン種は小麦全体を膨らませる。からし種とパン種のたとえを語るのは、神の国の秘められた力を、人の思いを超える神の計画を示すためである。

②畑を買う人も、真珠を買った商人とともに、持ち物を売るといふ同じ行動をとる。直訳にあるように、畑を買う人の行動は現在形で、真珠を買う商人の行動は過去形で書かれている。その人が貧しい人であれ、豊かな人であれ、それが偶然であれ、求めるといふ努力をした結果であれ、過去であれ、現在であれ、天の国は持ち物すべてを売ってでも手に入れたいと人が願うほどに「貴重な」ものであり、人に「喜び」をもたらす。

◎しかし、その天の国の現実には気づかない者もいる。天の国は、海へ投げられ、あらゆる魚を寄せ集める網に似ている。しかし、その網が岸に引き上げられると、良いものは入れ物へ選り分けられ、不適当なもの外へ投げ捨てられる。今、天の国はあらゆる魚を寄せ集める網のように、すべての人を包み込んでいる。しかし、その中には「不適当なもの」がいる。「不適当なもの」は、49節では「悪い者」と言い換えられる。「畑に隠された宝」と「貴重な真珠」のたとえとの関連で読むなら、ここでの「悪」とは倫理的な悪ではなく、持ち物すべてを売り払ってでも手に入れたいと人が願う「天の国」に気づかないことだと考えられる。

④「天の国」とは、人々を取り巻くあらゆる出来事に現れている神の働きという現実である。それに気づかない人は、世の終わりに泣くことになる。イエスの言葉と行いに現れている神の支配に気づくこと、それが神の求める正しさである。